



2012年6月18日

東日本大震災災害看護支援金における助成金事業報告会

兵庫県立大学・宮城大学看護東北プロジェクト

**看護系大学における
ペアリング支援活動モデル事業**

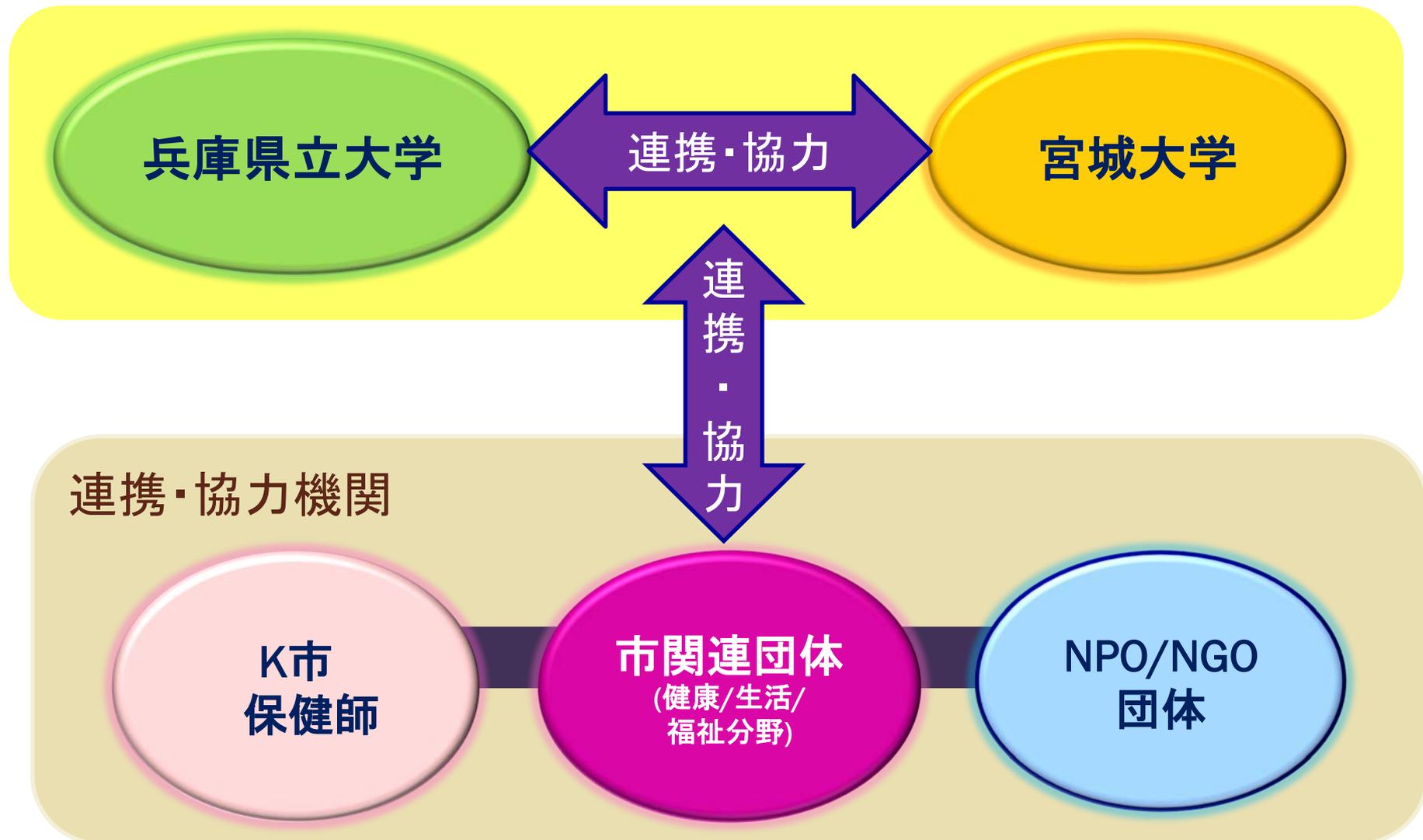
兵庫県立大学 地域ケア開発研究所

教授 山本 あい子

目的

1. 阪神・淡路大震災を経験した兵庫県立大学と東日本大震災を経験した宮城大学が、互いの経験を共有・統合しながら、連携して仮設住宅住民の健康支援を行う
2. この活動を通して、看護系大学のペアリング支援活動のモデル案を構築し、災害時の看護系大学におけるペアリング支援活動のモデルに関する示唆を得る

事業組織



事業メンバー

兵庫県立大学

山本あい子 (災害看護学 教授)
野並 葉子 (成人看護学 教授)
牛尾 裕子 (地域看護学 准教授)
高見 美保 (老人看護学 准教授)
黒瀧安紀子 (災害看護学 講師)
藤原 由子 (成人看護学 助教)
勝沼志保里 (博士課程災害看護学専攻)

宮城大学

吉田 俊子 (成人看護学 教授)
佐々木久美子 (地域看護学 教授)
塩野 悦子 (母性看護学 教授)
高橋 和子 (在宅看護学 准教授)

両大学のペアリング支援活動に含まれるもの

1. 両大学間の連携・協力体制の構築

- 1) 情報収集/発信・体験の共有
- 2) 活動に必要な情報/物資/知識/マンパワーの提供
- 3) 災害支援活動における相談への対応と提案
- 4) 本事業の活動に関する討議・決定
- 5) 現地の状況を体感覚で理解するための活動の実施

2. 他機関/団体との連携・協力体制の構築

- 1) 事業計画の説明と協力依頼
- 2) 情報の交換・共有・報告/今後の支援策の検討
- 3) 各団体とのイベントの同時開催・協力
- 4) 住民の健康に関連した提案

3. 仮設住宅住民への健康支援活動の実施

- 1) 健康相談
- 2) 家庭訪問
- 3) お茶会やイベントとの抱き合わせの健康相談
- 4) ケアが必要な人への対応

1. 両大学のペアリング支援活動における 連携・協力体制の構築

1) 情報収集と発信・体験の共有

- ①大学の被災状況や教員・学生の安否の確認(発災数日後)
- ②現地の被害状況や被災者のニーズ、被災地内外の支援活動の状況などの情報収集(テレビ、新聞、HPなど)
- ③兵庫県立大学は、宮城大学からの情報を受けて、被災地内の状況を国内外に発信した
- ④兵庫県立大学教員は現地に赴き、宮城大学の教員と現地訪問、互いの活動経験の共有(4月)
- ⑤災害に関するセミナー/シンポジウム等で経験の共有(9・10月)

2)活動に必要な情報/物資/知識/人材の提供

- ①支援活動に必要な物資(マスク、ゴーグル、軍手、長靴、防犯ブザー、野菜ジュース等)の送付、通信機器の調達
- ②阪神・淡路大震災の経験をもとに作成した「要援護者ガイドライン」の提供
- ③事業の活動を継続的に実施するために、現地に滞在できる人員として、兵庫県立大学博士課程学生(災害看護学専攻)を派遣

3)相談事項への対応と提案

- ①兵庫県立大学は相談や支援を行う準備があることを発信
- ②震災後の乳幼児健診で、どのようなことを聞いたらよいかについて、宮城大学を介して相談を受けた。阪神・淡路大震災の経験をもとに作成した問診表を、使用できる形式でメール送信した。また、いつでも相談や支援を行えることを伝え続けた。

4) 本事業の内容に関する討議・決定

- ① 兵庫県立大学より、本事業計画案を具体的に提示し、それを元に両大学間で討議し決定した
- ② 連絡・調整窓口の明確化(両大学間・両大学と現地の関連機関間)
大学間→両大学メンバーの代表者
現地の関連機関/団体→宮城大学A教員と兵庫県立大学院生
- ③ 討議・決定の場として、種々の機会(災害セミナーなど)を活用

5) 現地の状況を体でわかるための活動の実施

- ① 本構想メンバー顔合わせ(両大学間・現地の関連機関)
- ② 両大学のメンバーが現地に赴き、宮城大学が行っている傾聴ボランティア活動に参加
- ③ 現地の関連機関に対する本構想説明は、現状確認をしつつ実施

2. 他機関/団体との連携・協力体制の構築

連携・協力機関/団体一覧と既存の会議(平成24年3月時点)

・K市保健福祉部

健康増進課

地域包括支援センター

高齢介護課(友愛訪問事業)

社会福祉協議会ボランティアセンター

・市関連機関/団体(市の委託事業/業務)

K地区応急仮設住宅サポートセンター

K復興協会(KRA)

・NPO/NGO団体

日本国際ボランティアセンター(JVC)等

地区支援者
ミーティング

NPO/NGO
連絡会

2. 他機関/団体との連携・協力体制の構築

1) 本事業計画の説明と協力依頼

- ①宮城大学A教員が現地との連絡・調整窓口となり、必ずそこを通して実施
- ②事業の説明と協力を依頼する際は、宮城大学(A教員)と兵庫県立大学が顔をそろえて行った
- ③市には、本事業の活動内容を具体的に提示しながら、市保健師などの意向を把握・確認し、必要な箇所は修正し、同意を得た
- ④現地の状況がわかる市保健師に、担当仮設の選定(規模、移動範囲、ニーズ優先度)と自治会長への顔つなぎを依頼した
- ⑤NPO/NGO団体には、実際に現地にいるメンバーが、挨拶や説明を行い、かつイベントに参加した

2)情報の共有と報告/今後の支援策の検討

①地区の「支援者ミーティング」への参加(月1回)

- ・孤立死予防、見守り支援、コミュニティ作りに関する情報共有
- ・ケアが必要な人への支援内容やケア提供機関/団体の検討・調整

②「K市NPO/NGO連絡会への参加」(週1回)

- ・仮設住宅住民の生活問題やコミュニティ作りなどに関する情報の共有、支援策の検討
- ・メーリングリストに加わり情報の発信・共有

③市保健師への活動報告(月1~2回)

- ・仮設住宅住民の健康状態・健康ニーズ、生活状況などを統計データや具体的な事例などを使って報告
- ・「健康相談会」の内容の検討やチラシ作成にあたり、市保健師より住民のニーズなどの情報や助言を受けた

3) イベント開催への協力

- ①KRAお茶会と共に健康相談を実施(各仮設住宅に月1回)
- ②JVCイベント(仮設住民と周辺住民との交流会)時に健康相談を実施
- ③本事業の「健康相談会」に、KRAは住民への声かけやお茶会に協力、JVCは見学、市保健師はボランティアで参加

4) 住民の健康に関連した提案

- ①住民に体重増加の傾向が見られたが、多くの人が体重計が流されてなくなっており、自分で体重を判断できない状況から、集会所への体重計の設置を市保健師に提案し、県より体重計、血圧計が集会所に配布される予定となっている
- ②ボランティア団体に、住民の糖尿病の悪化や体重の増加などの状況を提示し、お茶会に出される菓子を減らすと共に低カロリー菓子への変更と手や身体を動かす活動内容への変更を提案

【結果】お茶会では、菓子の量が少なくなり、健康体操や編み物などの手や身体を使った活動内容に変更された

3. 健康支援活動

1) 活動内容/方法

(1) 健康相談

定期的(週2~3回、10時-15時)に、集会所/談話室で個別に健康相談、血圧・体重測定を行った

(2) 家庭訪問

集会所に来ることが難しい人には、「健康相談のお知らせ」のチラシに、こちらの連絡先を記載し、家庭訪問にて健康相談を行えるようにした

健康相談に来ない人に対して、一戸ずつ家庭訪問を行い、健康状態を確認した

(3) お茶会やイベントとの抱き合わせの健康相談

平成24年3月24日(土)10時-15時
住民の交流の機会/場づくりを含めた「健康相談会」を開催

市関連団体が開催したお茶会やイベントで、健康相談を行った(各仮設月1回)

平成24年3月24日(土)健康相談会の風景



健康相談



フットケア

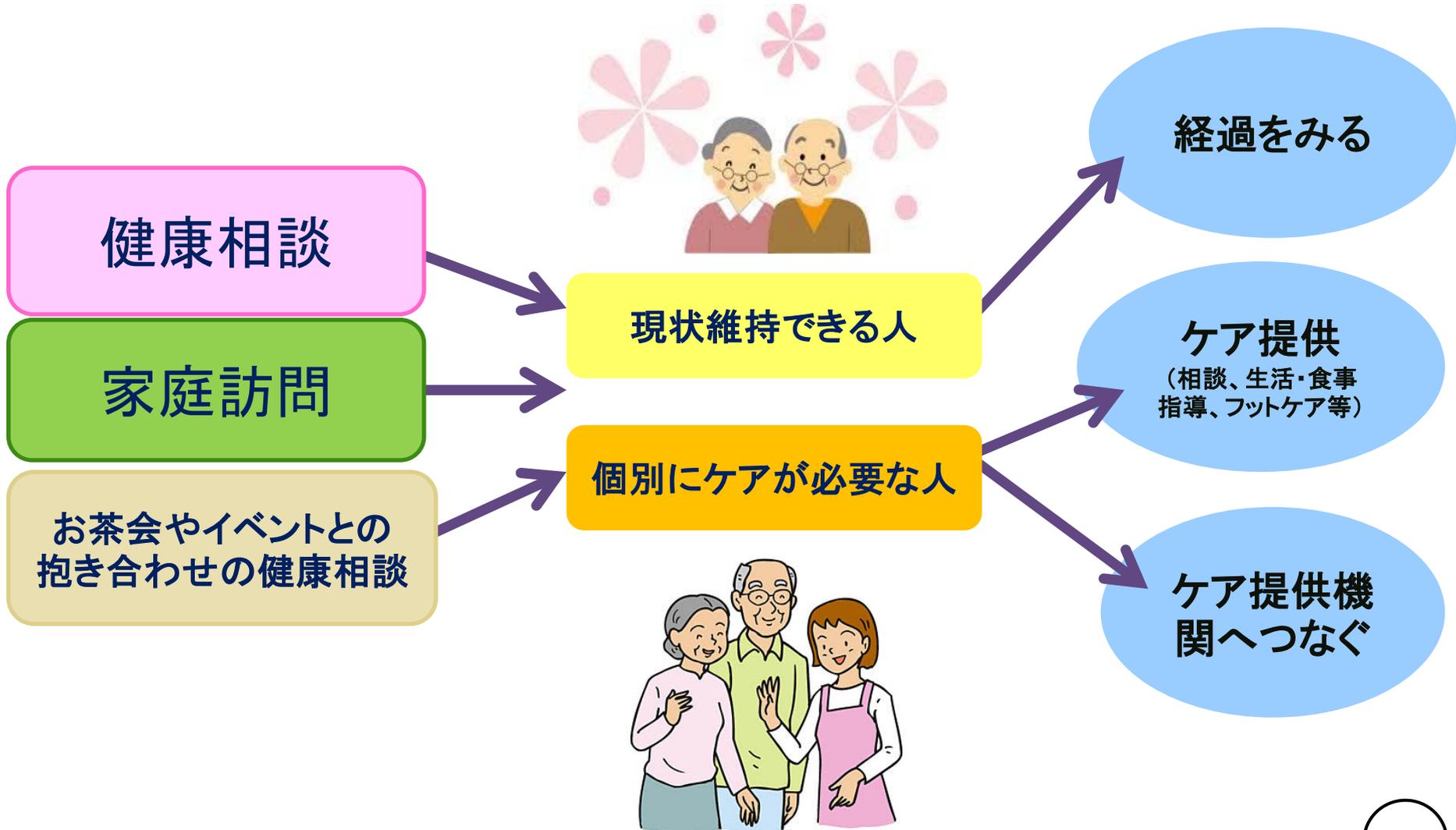
健康体操



お茶会



(4) ケアが必要な人への対応



2) 相談者について (2012年3月14日～31日)

(1) 基礎情報

相談者数：34人 (在宅居住者7人含む)

性別：男性8人、女性26人

年齢：58歳の1人を除くと、65～87歳の高齢者



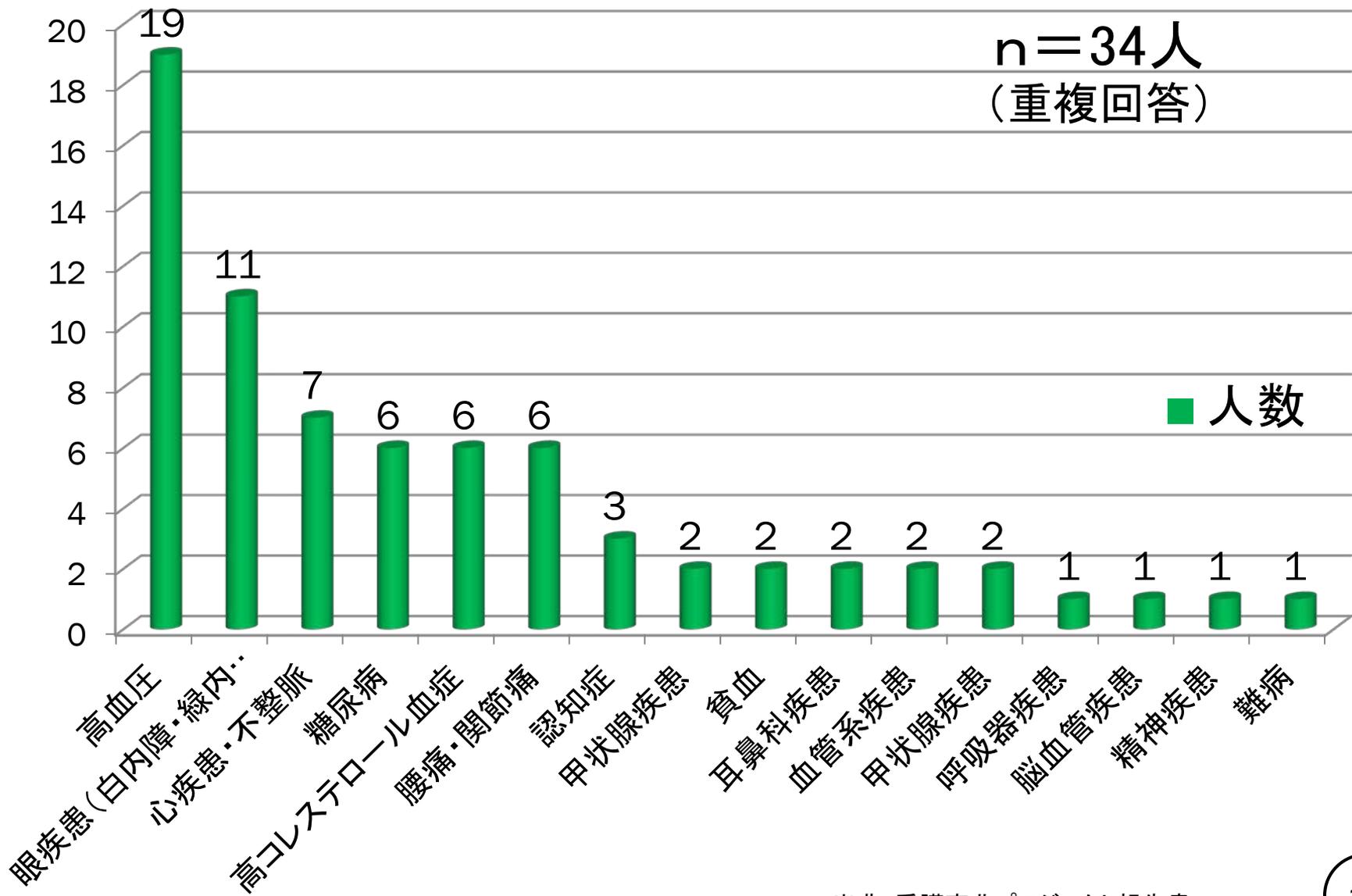
(2) 生活習慣

日常から近隣住民の家に集まり、“お茶っこ”をする風習がある。常に、菓子や漬物が手の届くところに置かれ、高い塩分/糖분을摂取する機会が多く見受けられた。震災後は、コミュニティ作り活動が盛んになっており、お茶っこの機会が増加している

(3) 受診状況

仮設には病院巡回バスの送迎もあり、病院に定期受診(週1回～月1回程度)して内服も継続できている。しかし、バス停が坂道を降りたところにしかない仮設もあり、足腰が悪い人は坂道を降りられず、タクシーで病院に行かなければならない状況

(4) 現病歴



(5) 相談内容

- ① 定期受診や内服を継続していても、持続して見られる血圧の上昇(平均140-160/60-80mmHg)、血糖値の上昇やそれに伴う足の傷の治癒遅延、新たな内服薬(糖尿病薬、強心剤、降圧剤)の開始/増量などからみえる慢性疾患の悪化
- ② 「食べることだけが今の楽しみ」「お茶会で人にすすめられるとつい食べてしまう」といった菓子などの糖分/カロリー摂取量の増加
- ③ 「散歩する場所がない」「狭い家で動くことがなくなった」といった活動量の低下
- ④ 「体重計が流されてなくなってから、体重を計っていない」という人が多く、健康相談で計ると体重の増加(+5~10kg)が見られた。一方で「体重が減ったまま戻らない」といった体重の減少もあった

- ⑤「時々、災害の夢を見て眠れない。眠れないとイライラする」、「今後のことを考えると眠れない」、などの不眠が見られていたが、眠剤を調節しながら対応していた。
- ⑥「避難する時に津波を見なかったから、今になってテレビの映像を見ると地震が怖くてたまらない」、「余震が怖くて目が覚める」といった地震への恐怖
- ⑦男性が仕事をなくし、「家にいてもすることがない」「酒だけが唯一の楽しみ」と飲酒量の増加
- ⑧生活の場でじっくり話を聞くと「何を食べたらいい?」、「どうして血圧が上がるの?」等と質問があり、病気に対する知識や対処方法をあまり知らない人もいた。病院には通っているが、医師には聞きづらいという思いがあり、診察時に聞いて疑問を解決することは難しそうであった。

- ⑨「母親が被災した自宅に住んでおり、認知症がひどく、火の消し忘れや血圧の薬の飲み忘れもあり、血圧も高くて心配」(60歳代女性)
- ⑩「震災後から急激に白髪が増えた」(60歳代男性)
- ⑪「震災後、姉妹を亡くし、病気や身体のことを相談する人がいなくなり、白内障の手術を本当に受けた方がいいのかわからないでいる」(70歳代女性)
- ⑫「もっと話したい、会話がなく少し寂しい。働かずにいるので息子たちに悪いと思っている。生きていていいのかと思う」(80歳代女性)

まとめ - 両大学のペアリング支援活動概要 -

1. 両大学の連携・協力体制の構築

情報の収集/発信

体験の共有

情報/物資/
知識の提供

事業計
画提案

事業内容の討議

災害看護支援活動におけ
る相談への対応・提案

現地理解のた
めの活動実施

人材派遣(院生派遣)

2. 他機関/団体との連携・協力体制の構築

本事業説明・挨拶・協力依頼

情報の共有と報告

イベント開催への協力

住民の健康に関連した提案

3. 仮設住宅住民への 健康支援活動

健康相談

家庭訪問

お茶会・イベント抱き合わせの健康相談

ケアが必要な人への対応

発災

2011年
3月11日

2012年
1月

4月

9月

12月

2月

3月

出典:看護東北プロジェクト報告書、2012

災害時の看護系大学におけるペアリング支援活動の具体例

被災地外大学

1.情報の収集/集約をしながら被災地像を描く

個人ネットワークを介して被災地内大学に状況を問いかけながら、主としてテレビ、新聞、インターネットから情報を得る

2.連携・協力できる私達がいることを発信し続ける

被災地への相談/支援の準備があることを発信したり、被災地内大学を訪問し、互いの経験を共有する

3.被災地内のニーズと思われるものに対応する

被災地内からニーズが発信されてこなくても、必要な物資/知識/情報/人員の提供していく

4.必要と思われる健康支援活動を提案し、相手の気づきを支援する

被災地外大学が具体的な内容を示しながら提案

5.人材派遣

被災地外の大学が院生を現地に派遣する

被災地内大学

2.被災地内の情報を発信する

できる範囲で被災地の現状やニーズを発信する

1.状況に対応する

3.質問や問題を問いかける

被災地内での災害対応や支援活動を通して、出てきた具体的な質問等を被災地外大学に相談する

4.必要な活動に気づく

5.被災地のニーズを主張する

活動が被災地のニーズにあうように修正する

6.現地との調整

被災地内大学が現地の関係機関と調整を行う

連携・協力体制の構築

健康支援活動の実施

発災

4月

10月

11月

3月

他機関

他機関/団体との連携・協力体制の構築

災害時の看護系大学における ペアリング支援活動のモデル案に関する提言

1. 日本看護系大学協議会（JANPU）は、平常時から会員校間のネットワーク作りを促す（共同研究・活動等を介して）
2. 会員校は、組織として既存のネットワークの活性化を図り、システムにのせる。災害発生を想定し、相互の役割を明確にする
3. 被災地の仮設住宅等で、実習／演習が実施できるよう計画し、JANPU会員校に呼びかける

ご清聴
ありがとうございました